

学校にとって役に立つスクールカウンセリングとは何か？[†]

—東日本大震災で起きた「心理主義化」への対応からの検討—

柴田 健*

秋田大学教育文化学部

スクールカウンセラーの学校教育への浸透に伴い、学校教育の「心理主義化」が問題となっている。2011年3月に発生した東日本大震災に伴い、秋田県は多数の被災転校生を受け入れることとなり、これをきっかけに急激な「心理主義化」が進んだ。被災転校生には「心の傷」があるという言説が流布し、学校に緊急スクールカウンセラーが導入され、被災転校生のカウンセリングや教員へのコンサルテーションが行われることとなった。筆者は緊急スクールカウンセラーの一人として、教員へのコンサルテーションを中心に活動した。コンサルテーションを行うに当たっては、「心の傷」言説に与することなく、転校生受け入れの際に教員が行った活動や工夫を明らかにするというインタビューアの役割を取った。本稿では、3つのコンサルテーション活動について報告し、社会構成主義的心理療法の観点から考察を行った。

キーワード：スクールカウンセリング、心理主義化、コンサルテーション、社会構成主義心理療法、東日本大震災

I はじめに

1995年に文部省（現・文部科学省）が「スクールカウンセラー活用調査研究事業」を開始してから、スクールカウンセラー事業はその形態を変化させながら、現在まで継続されている。スクールカウンセラーに対する評価は概ね肯定的である（文部科学省、2009）が、その一方でスクールカウンセラーの導入が学校教育の「心理主義化」を進めることにつながっているのではないかと批判も生じている。

「心理主義化」について森（2000）は、「心理学や精神医学の知識や技法が多くの人々に受け入れられることによって、社会から個人の内面へと人々の関心が移行する傾向、社会的現象を社会からではなく個々人の性格や内面から理解しようとする傾向、及

び『共感』や相手の『きもち』あるいは『自己実現』を重視する傾向」と述べている。

「心理主義化」の問題は、外にある問題を個人の内面の問題にしてしまうところにある。このことについて吉田・中井（2003）は、スクールカウンセリングでは学校に問題の子どもを適応させようと努力するあまり、問題状況を取り巻く教育システムや学校組織、地域社会の問題といった社会的要因に目を向かわなくさせるとしてスクールカウンセラーの導入に対して疑問を呈している。さらに、スクールカウンセラーがとる非指示的な態度そのものが学校教育と相いれないものという考えもある。例えば小沢（2002）は、カウンセリングに特徴的である非指示的態度を自らおのずと決まっていることを語らせるという「自己決定を装った支配の一形態」であり、「(クライアントに) 審査基準を探らせそれを内在化させる」機能を持つ「優しく巧妙な管理技法」とであると指摘し、このような方法を学校教育に導入することを批判している。

このような学校の「心理主義化」に関して臨床心

2016年1月8日受理

[†]What is useful school counseling for school? Study from the dealing with "psychologism" caused by the Great East Japan Earthquake

*Ken SHIBATA, Faculty of Education and Human Studies, Akita University

理学の領域から問題提起されることはこれまでなかった。ただし、臨床心理学の考え方を背景に持つスクールカウンセリングが、その方法において学校教育と考え方や理論的枠組みが異なっているということについては、早くから臨床心理学の領域からも指摘がなされていた。この問題に対して、スクールカウンセリングではコミュニティ心理学の方法を取り入れるという技術的、理論的な面から対応を模索してきた（下山，2001）。特にこの中で重視されてきたのがコンサルテーションだった。コンサルテーションは「コンサルタントがコンサルティに対して、コンサルティのかかえているクライアントの精神衛生に関連した特定の問題をコンサルティの仕事の中でより効果的に解決できるように援助する関係」（Caplan, 1961；山本，1986）と定義されている。コンサルティである教員の専門を重視し、連携することにより、SCは学校教育への配慮をしてきたと考えられよう。しかし、コンサルテーションの中で使用される言葉が心理学の用語であれば、そのコンサルテーションは「心理主義化」を進めてしまう可能性を持っていたと考えられる。さらに、コミュニティ心理学の考えを導入することは、コミュニティ心理学がすべての個人を対象としていることから考えると、そこで行われる心理学的行為と従来行われてきた教育的行為の線引きをかねてあいまいにする（中島，2008）おそれもあった。

一方、学校教育の中ではいじめや不登校、発達障害など多くの問題を教育上、生徒指導上の問題として抱え、中島（2008）が述べるように「忙しい教職員はどう対応していいかわからない生徒に出会うと、悩むことなくスクールカウンセラーにゆだねてしまう」という状況が生じるようになり、「ゆだねられたスクールカウンセラーも、生徒を外部の機関などに任せてしまうことも少なくない」という混乱も起きていた。

こうした状況からは、連携を強調しながらも、図らずも「心理主義化」に加担してしまっているスクールカウンセラーの姿が見えてしまう。また、本来教育の中で行われるべき児童生徒への教育的関わりをスクールカウンセラーに下請けさせていた教師も少なからずいることがわかる。そこには、スクールカウンセラー、教師双方とも「心理主義化」に対して無自覚だったという経緯が見られ、決してスクールカウンセラーや臨床心理学だけにその「心理主義化」

問題を帰することはできない。しかし、教員とスクールカウンセラーの協働を考える場合、従来の学校教育の枠組みを変えずにスクールカウンセラーとして何ができるかを考えるためには「心理主義化」が生じてきた状況と、スクールカウンセラーがその中でできることを考えていくことは重要であると考える。

「心理主義化」は大きな事件や事故が起きたときに、急激に浸透していくことが示されている。木村・小針（2010）は、「心理主義化」の指標としてPTSDの新聞紙上での語られ方を指標に分析を行っている。当初はベトナム戦争帰還兵に付与された障害として語られることの多かったPTSDであるが、その後語られる領域は「災害・事故」、「犯罪」、「教育」、「医療」、「労働」などに拡大し、被害者を救済するための障害として地位を拡大していった。木村・小針は、特に「災害・事故」、「教育」、「犯罪」の領域において、生じた出来事との関連の強さを指摘している。彼らのデータを見ると、1995年1月の阪神淡路大震災以降PTSDの語りが一気に増えているのである。

秋田県においても、2011年3月に発生した東日本大震災の後に広くPTSDに関する言説が流布し、「心理主義化」が一気に進んだと考えられるような出来事が学校の中で生じている。そして、このときに沸き起こった「心理主義化」はその後のSC活動に少なからず影響を及ぼすことになった。

本稿では、このときに本県で生じた出来事とその後筆者が行ったSC活動を報告しながら、「心理主義化」を踏まえた学校にとって役に立つスクールカウンセラー活動の在り方について考察する。

II 秋田県における緊急スクールカウンセラー事業の概要

東日本大震災によって生じた原発事故のため、多くの住民が自分の家を離れざるを得ない状況になり、それに伴って多くの児童生徒が転校している。本県でもピーク時に238名の児童生徒が被災地から転校してきた（2012年1月25日時点）。県教委は、文部科学省の震災支援事業の一環としてこうした被災転校生への支援のために、緊急スクールカウンセラー（以下緊急SC）を被災転校生が在籍する全ての小中学校に派遣することを決めた。

具体的には、県内を4地域に分け、それぞれの地

域を担当する緊急SCを選任し、その地域の被災転校生のいる学校を訪問する（計画的訪問活動）という形で行われた。計画的訪問活動で対応できないような問題が生じた場合には、要請による訪問活動が行われる予定だった。選任された緊急SCは計25名だった。筆者もその一人としてこの事業に参加した。

6月中旬には、25名の緊急SCを集めての緊急SC配置事業連絡会議が開催された。その会議の冒頭に行われた教育幹部の挨拶要旨は次のようなものだった。

「未曾有の大震災を体験した児童生徒の多くは、心に深い傷を負っている。しかし、こうした心の傷は普通の傷とは異なり見えにくい。そのため、教育の現場ではこうした子どもたちが示すサインが見逃されやすくなる。そこで臨床心理士等の心理学の専門家を被災した児童生徒が転校してきた学校に配置し、子どもたちの示すサインに早い段階で気づけるようにすることで、落ち着いた学校生活を早く送れるように支援していきたい」

8月中旬から第一次計画的訪問活動が開始され、翌年の1月上旬からは第二次計画的訪問活動が開始された。第一次計画的訪問活動が始まる時には、トラウマに関する話題がマスコミ等で取り上げられるようになっていた。また、本県で起きたことではなかったが、活動開始当時はちょうど被災転校生が転校先でいじめられる等の報道が盛んに行われていた。

特筆すべきこととして、この時期すでに活動を開始していた緊急SCの訪問活動が東北地方の報道番組で放映されるという出来事があった。放映された内容は、被災転校生の中学生女子に対して描画検査を実施し、描かれた内容からうかがわれる心の傷について担任や養護教諭と話し合うというものだった。その後のニュースキャスターの会話は被災転校生の多くが我々の知らないところで心の傷に苦しんでいるということを訴える内容となっていた。この番組はその後も何度か繰り返し放送され、多くの関係者が目にしたことが推測された。

Ⅲ 状況のアセスメントと方針の設定

緊急SCの派遣までの経緯と社会の動きを考え合わせ、筆者は次のようなアセスメントを行った。

本県での緊急SC支援は、被災地の学校で行われる支援と根本的に異なるものと考えられた。被災地

の学校では児童生徒全員が何らかの形で被災しているのに対して、この緊急SCの場合、転校生以外の誰も被災体験をしていないということを考慮する必要があった。そのため被災転校生は、通常の転校生よりも自分が学校の中で異質であるという感覚を持ちやすい可能性があることが推測された。彼らが異質であるという感覚は転校生自身が感じるだけでなく、転校生を取り巻くクラスメートや教員間にも生じる可能性がある。しかも、緊急SC配置会議での教育幹部の挨拶が示すとおり、被災転校生がトラウマを持っているという言説が教員の間で広がっている可能性が高く、転校生受け入れに対する学校側の不安が増大し、状況によっては腫れ物に触るような対応や行動の異常だけに関心が向く可能性も考えられた。さらに、転校生の行動や生活に何の問題も生じていない場合でも、関わる教員は彼らが心の傷を表に見せないだけにとらえるおそれもあった。また、転校生本人に対して面接をするという行為そのものが、教員の持つ「心の傷」言説を強化してしまう恐れもあった。

そこで、筆者は次のことを学校訪問の方針とした。

1) 教員の支援を中心とした活動を行い、特別な要請がない場合には児童生徒との面接を行わない

被災転校生に中心に関わるのは教員であるということを示すために、できるだけコンサルテーションを中心とした活動をすることとした。

2) 被災転校生は心に傷を持っているという話には与しない介入を行う

教員が中心となって被災転校生に関わっていくためには、コンサルテーションの中で行われる会話がトラウマやPTSDに関する話題にならないようにする必要があった。

3) 心理学や精神医学の用語ではなく、教育に関連する言葉を用いた支援を行う。

教員が中心となって彼らに関わることができるよう、できるだけ心理学や精神医学の用語を使わず、教育に関連する言葉を用いることとした。

4) 可能な限りシングルセッションでの関わりとする

複数回の面接を行うことにより、教員が対象となる転校生の心の傷が深刻なものであると推測するおそれがあった。そこで可能な限り1回の面接で支援を終了するように工夫し、さらに問題にとらわれないフィードバックを教員に対して行うこととした。

このような方針は、必ずしも担当した事例全てに適用できたわけではない。しかし、できる限りこの方針に従って支援を行うように心がけた。

IV 実際の緊急SC活動

本稿では、8月から行われた第一次計画的訪問活動で筆者（以下SC）が担当したものの中から、「活動1：対象児童がLDの診断を受けていると引継ぎがあった児童への対応」、「活動2：途中で担任が交代することになったことへの対応」、「活動3：学校関係者の情報交換会議へ出席し助言を求められた際の対応」の3事例を報告する。3事例とも1回の訪問活動で終了している。なお、活動先の学校種はいずれも小学校である。

活動1：対象児童がLDの診断を受けているという引継ぎがあった児童への対応

依頼事項：A県の総合教育センターでLDの診断を受けており、本時のどのように関われば良いのか心配になった

コンサルティ：小5クラス担任

対象児童：Bさん（小学5年女子）：A県から母親と中1の姉と3人で転居。父親は仕事の都合上、単身で滞在を続けている。本県は全く知らない土地とのこと。

活動の経過：校長室に呼ばれ10分ほど校長と懇談。その後担任が校長室にやってきて空き教室へ移動する。

以下、SCの発話を〈 〉担任の発話を「 」で示す。

担任はBさんについて、原発に近いところにある町から転校してきたこと、中1の姉がこちらでも部活を続けたいと本中学に転校し、それに伴ってBさんも近隣の小学校に転校してきたことを話した。またBさんは、A県の教育センターで軽度LDの診断を受けており、母親は転校に伴って仲間はずれにされたりいじめられたりしないかを心配しているとのことだった。この段階でSCは、LDの学級内適応に関連する問題か、学級内のいじめ対応に関する問題のコンサルテーションになることを予測した。

〈お母さんが心配されているようなことはあるのでしょうか?〉と尋ねた。担任の答えは、「こちらが見ている限りは無いと思うのですが」だった。コンサルテーションの早い段階で、「無い」と話すと

いうことは相当な観察の根拠があり、何らかの働きかけが継続的に行われていたことが推測できた。そこで、〈いろいろと大変だったと思うのですが、どうされてきたのですか?〉とねぎらいの言葉を加えながらこれまでの対応について尋ねた。すると、「子どもたちにはBさんが転校して来た理由をできるだけ子どもたちが理解できるように話してあげました。そうしたらクラスの中で以前転校した経験のある子どもが自分の転校してきたときの気持ちについて話してくれたのです。そして話し合いを続けているうちに普通に接してあげようよということになりました」と担任は話した。この時期、上述したようにA県からの転校生が転校先でいじめられたという話がマスコミを通して報道されたばかりであり、転校生へのいじめについてクラス討論が繰り返行われていたようだった。

このエピソードから、SCはコンサルテーションの方向性を、担任のクラス経営の方法について尋ねエンパワメントするという方向で考えることとした。そこでSCは、そのようなことを話し合えるのはすごいクラスであると伝え、それ以外のBさんに対する配慮について尋ねた。すると担任は、仲の良い子どもをBさんの席の隣にするという工夫についても話した。〈それだけ配慮されるとお母さんも安心されていますね〉と確認すると、「ええ、お母さんは生活にもずいぶん慣れていらっしやるようですね」と言った。

さらに担任は、宿泊研修をBさんの交友を広げる機会に利用したことを話した。〈そうするとBさんも友達がたくさんできて、学校が楽しいんでしょうね〉と尋ねると、「Bさん本人の明るさもとても大事だったと思います」と、Bさんの笑顔の多さが交友関係に役立っていることや、いつも担任のところに笑顔でやってくるBさんのことが話題となった。

担任のクラス経営術を尋ねるという方向で進むことを最終的な目標として、次のように質問した。〈クラスをまとめるに当たりどのようなことを工夫しているのですか?他の先生の参考になればと思うのですが〉。すると担任は「何も工夫はしていないのです。今のクラスの多くの子どもは私が担任をして3年目なんです」と答えた。〈とすると、先生の思いや教えが今の子どもたちに染みついているということですか?〉「そうかもしれません」。この話の後、担任がお互いに友達の良いところを見つけられるように

することを大事に考えて指導してきたことが話された。

SCはBさんのLDについて改めて現在の問題について確認したが、今のところ問題が無いということで、コンサルテーションを終了した。

帰り際に再び校長室に案内された。校長と担任が心配そうな顔をしていた。

校長が「いかがでしたか？」と尋ねてきたので、〈とても参考になる話を聞くことができました。私の方が勉強させていただきました。ありがとうございました〉と伝えた。

活動2：途中で担任が交代することになったことへの対応

依頼事項：担任が病休を取るようになった。新担任が対象児童に対してどのように関わればよいのか。

コンサルティ：担任A先生・新担任B先生

対象児童：Cさん（小2女子）：A県から母親の姉の元に母親と兄と転居。

活動の経過：校長室で校長に挨拶をした後、すぐに隣の会議室に通される。そこには、担任と新担任がすでに座って待っていた。

以下、SCの発話を〈 〉、担任A先生の発話を「 」、新担任B先生の発話を『 』で示す（実際の会話の中ではA先生、B先生）を使用する）。

はじめに、担任と新担任から自己紹介を受けた。担任は、「私ちょっと体の調子を壊してね、明後日から病休を取ることにしまして」と話した。SCは、このコンサルテーションが担任から新担任への引き継ぎの場を兼ねていると推察した。担任は続けて、CさんはA県の実家に近い街に住んでいて、そこが避難の対象になったと同時に、母親の姉を頼って引っ越ししてきたことや、もともと耳に持病がありおとなしい子なので学校でちゃんとやれるのか母親が心配していたこと、さらに転校当初は積極的に友達と関わっていたのだが、母親の姉に子どもが生まれ、母親が育児の協力に忙しくなったときあたりから、おとなしくなってしまったこと、さらに自分の病休がCさんに影響してしまうかもしれないこと、などを話した。この話からSCは、Cさんがクラスに馴染んで積極的に遊ぶことができていた時期があったことや、Cさんのことを考えると担任は新担任に引き継ぐことに心配していることを推測した。そ

で、Cさんのクラスでの情報収集を始めた。

担任によると、Cさんは4月の頑張っているときから比べると点数の面で下がっており、それは送られてきた指導要録よりも下がっている状況とのことだった。SCが、〈転校当初とは違っている？〉と確認すると、担任は「以前は遊びの質が違っていた」と述べた。SCは改めて、「Cさんはクラスにはずいぶん早くなれたということですか？」と比較的クラスでの適応が良かった時期の状況を確認すると、担任は頷いた。

SCは〈馴れさせたのには何か秘訣があったのですか？〉と担任の工夫について尋ねると、担任は、「別にCさんのためではないのですが、教室にいろいろな遊び道具を置いておくんですよ。それが良かったみたいですね」と話した。それによると折り紙やトイレットペーパーの芯などを集め、それを教室に置いて子どもたちに自由に工作をさせているらしい。SCが〈それはどういったアイデアから？〉と尋ねると、担任はこれまでの低学年の児童の関わり方について話してくれた。新担任は担任の方を向いてそれを確認するように頷いていた。SCから見ると、新担任の姿は担任からクラス経営の方法を引き出そうとしているように思われた。そこでSCは新担任の方を向いて、〈その様子を何度かごらんになられたことはあるのですか？〉と尋ねた。すると新担任は、『はい、A先生のクラスはすごいですよ、子どもたちに活気があって』と若干緊張を伴った様子で話した。その話によると、新担任は時々担任のクラスのティーチング・アシスタントをしていたらしく、その中でCさんとの関わりがあったとのことだった。

新担任の緊張した様子からは、担任のクラスを引き継ぐことを負担に思っている様子が感じられた。そこでSCは、新担任をエンパワメントする方向に話を変えていこうと、〈新担任から見るとCさんの様子はいかがですか？〉と尋ねた。新担任は遠慮がちに、『私は時々しか見ないのですが、でも確かに元気なさそうにしていることはありますよね』と話したので、〈じゃあ時々しか見ないけれどもA先生と同じ認識？〉と確認した。すると新担任は『そうですね』と頷いた。SCは〈では、B先生もA先生も認識は同じで、Cさんの“遊びの質”の変化が確認されている？〉と同様の認識であることを驚きながら確認し、さらに両者の認識が共通しているこ

とを強調しながら、担任と新担任の共通する子どもの見方について両者の考えをすり合わせながら尋ねていった。新担任と担任の認識の仕方にはあまり違いは認められず、担任によれば子どもの“遊びの質”が違ってくるときは要注意であり、Cさんには要注意の遊びの質の変化があるとのことだった。このことには、新担任もしきりと頷いていた。

SCは、Cさんの遊びの質が下がってきたときにどのように対応したのかを尋ねた。すると担任が「近所にDさんという子がいるのですが、その子にCさんを遊びに誘うように言うんです」と答えた。担任の話によると、二人は転校当初から仲が良かったため、Cさんが元気なさそうに見えるときには、決まってDさんにCさんを遊びに誘うように話してきたらしい。〈じゃあ、Dさんは、遊びの質を変える“最終兵器”のようなもの?〉とSCがあえて強調しながら尋ねると、「そうそう!」と担任は笑いながら頷いた。さらに“最終兵器”が必要になる状況について尋ねると、Cさんに笑顔がなくなった時と話した。逆に笑顔が出てきたときは“最終兵器”の効果があったときだということも担任の話から判明した。そして担任は、新担任に対してCさんに何かあったらDさんをお願いしたらいいよと自分から話し、「時間なので」とそそくさと退室した。

SCは〈今日のこの話は、A先生がB先生に伝えたいことを話す時間だったようですね〉と担任の相談の意図を汲みながら話し、新担任に対して今後できそうなことを確認した。すると新担任は『A先生みたいにはできないでしょうけれど、まあ何とかやってみます』と答えた。新担任にはまだ不安な様子が見られたので、担任とは今後も連絡が取れるのか尋ねてみた。それによると、必要に応じて連絡は取れそうだった。そこで、“最終兵器”の話に戻し、その活用の方法を改めて確認した。新担任は笑顔を見せながら“最終兵器”の活用の仕方について本人なりのアイデアを教えてくれた。

帰り際に校長室の入り口で終了の挨拶をすると、校長が不安そうに「いかがでしたか?」と尋ねてきた。そこでSCは、〈A先生がやってこられたこととB先生がこれからやろうとしていることがとてもよくわかりました。かえってこちらの方が勉強させてもらいました〉と話した。

活動3：学校関係者の情報交換会議へ同席し助言を求められた際の対応

依頼事項：被災した児童に対する教職員との情報交換に出席してほしい

活動の経過：SCが校長室に案内されると同時に隣の職員室から参加者が集まってきた。参加者は、校長、教頭、生徒指導主事、養護教諭、担任3名の計7名だった。すでにテーブルには名札が置かれ、さらに事例検討会次第が配布されていた。

校長の挨拶の後、自己紹介が始まった。全員が緊張した面持ちで所属を話した。その中で生徒指導主事が明らかに拒否的な態度であることが分かりSCは歓迎されていない雰囲気を感じた。

避難してきた児童3名について、6年担任、3年担任、2年担任の順に報告が行われた。全員A県からの転居であり、6年と3年の児童はきょうだいだった。6年担任からは5月に対人トラブルがあったがその後は問題なく経過していること、3年担任からは深刻な感じは無く、母親も心配していないこと、2年担任からは最初表情が硬かったがその後は友達仲良く過ごしていること、がそれぞれ報告された。いずれの報告も、程度の差はあるものの当初何らかの危機状態があったが、その後状態が改善したという内容だった。そこでSCは、学校でのこれまでの対応について評価しながら尋ねることとした。

すると学校では、転校してくる児童それぞれの保護者と事前に連絡をとり、他の児童に対する転校理由の伝えかたをどうするか確認していることが分かった。SCは、校長と教頭の方を向きながら学校の細かな配慮に感動したと述べ、事例検討会という無駄な時間をわざわざとっていただいて申し訳なかったと謝った。さらに、「震災対応の緊急スクールカウンセラーといっても、毎日見ている先生方以上のことは分からないものなんです。先生方のこのような毎日の関わりには我々は全くかないません」と話した。このとき、これまで腕組みをしていた生徒指導主事がこちらを見て頷いた。

その後、養護教諭と3名の児童の身体面に関する状況を確認した。3人のうち一人が体調不良を訴え、たまに保健室に来ることがあるとのことだった。養護教諭の話によれば、身体的対応で回復するという事なので、引き続きそれを続けてもらうことを依頼した。SCはその時に、「体調不良な子どもには、先生が体調不良の関わりをすることが一番です」と

伝えた。

校長の終わりの挨拶の後SCは、「今日の各先生からのお話は、大変参考になりました」と挨拶し、事例検討会を終了した。

学校訪問に関するその後の状況

訪問対象となった各学校からその後の相談依頼はなく、通常どおり第二次訪問活動が新たに別の緊急SCによって実施された。

V 考察

1. 「心理主義化」の背景

先に示した緊急SC配置会議の席上での教育幹部の挨拶やその当時のマスコミ報道が示しているように、震災をきっかけに被災転校生は「心の傷」を持っているという考えが教育関係者含む世間一般に広がっていたことは明らかだった。このような「心の傷」が原因で児童生徒に何らかの症状が出た場合、それは教員が対応できるものではなくなってしまふ。また、児童生徒が何の症状も示さない場合でも、環境の変化によりそうした症状を出すことができない状況にいるか、出している症状そのものを教員が把握することができないという状況が生じてしまふ。実際に被災転校生を受け入れた多くの学校では、彼らが何の症状も示さないことに不安を募らせていた。スクールカウンセラーはこうした状況の中で精神科医と並んで児童生徒の心の状態を理解し、治療することができる心の専門家と位置づけられていた。この時期はまさに「心理主義化」が進んでいた状況と考えることができよう。

なぜこの時期、学校は極端な「心理主義化」に陥ってしまったのだろうか。その背景には先に述べたような本県特有の被災者が置かれた状況の違いによるだけではなく、さらに次のような背景要因があったものと考えられる。

その一つがトラウマやPTSDに関する理解のあいまいさである。この時期被災者の多くはトラウマを抱えPTSDを発症するおそれがあるため、心のケアが必要であるという言説が流布していた。そしてトラウマ状況では回避や過覚醒といったASD（急性ストレス障害）症状が起きるのが一般的であり、それは問題ではないということが繰り返し説明されていた。その一方でこうした症状がなぜ生じるのかという脳科学的、生理学的メカニズムについては詳し

く説明されることは無かった。

ここでのトラウマやPTSDという概念は、「素人でも受け入れられるように『こころの専門家』と呼ばれるひとたち（精神科医、臨床心理学者、カウンセラーなど）がわかりやすく発信する、人間の心理や行動に関する知識や技法（森, 2008）」である「ポップ心理学」での理解の範疇にとどまっており、社会的には「心の傷」というイメージ以外はなかったと考えられる。こうした背景には、PTSDの概念自体がきわめて個人的な体験によって規定されるという疾病そのものの特徴や、それゆえPTSDが個人に及ぼす影響や治療法に関する研究が発展途上であるということが影響していたのではないかと考えられる。トラウマやPTSDの明確なイメージが示されることなく、急性ストレス症状が生じることは当たり前前であるという情報だけが流布する中で、正常と異常の境界が教育関係者だけでなく社会全般の中でわからなくなっていた状況が考えられる。

また、スクールカウンセリングの業務としての曖昧さも影響していた可能性がある。伊藤（2005）は、スクールカウンセラーが学校に浸透していった経緯について、「専門性や技法を生かした形での問題への介入」よりも、「問題を抱えた生徒や普通の生徒の話をじっくりと聞いてやり、共感して寄り添う『姿勢』や『心構え』」であり、スクールカウンセラー自身がむしろ積極的に専門性を強調しない形で自らを位置づけることにより業務を行い、学校への浸透を図ってきた」と論じている。こうしたスクールカウンセラーの態度は、教員にとってスクールカウンセラーの業務イメージを曖昧にしてしまうことにつながっていた可能性がある。スクールカウンセリングを行うに当たっての個人心理学からコミュニティ心理学への方法論の移行そのものが、結果的に「心理主義化」が浸透しやすい素地を形成したものと考えられる。

もちろんこの問題はスクールカウンセリングだけに言えることではないだろう。何か事故や災害があった場合、「心のケア」という言葉が用いられることが多い。しかし、そこで行われる治療的行為はスクールカウンセラーをはじめとする臨床心理士や臨床家個人に任されており、多くの人は実際に何が行われるのかわからないという状況がある。そこには、せいぜい受容、共感を重視するカウンセリングのイメージしか無いと考えられるのである。

2. 「心理主義化」への対応のために

この時期、学校における被災転校生を巡る語りはトラウマとPTSDという臨床心理学や精神医学の言葉と結びつけられ、学校教育と結びつけられることはなかった。このように「心理主義化」が進んだ状況と考えられたからこそ、会話を教育の中で用いられる会話にシフトさせ、トラウマやPTSD中心の語りではなく、教員の行為が中心として語られる語りを作り上げていく必要があった。

SCはこうした会話を繰り返すために、心理の専門家としてではなくインタビューの立場をとった。永江(2012)によると、インタビューは虚構であり、語り手の意図とインタビュー者の意図がせめぎ合い、その中で見せたいものを見せたいように見せるものである。こうしたインタビューの役割をとることにより、スクールカウンセラーとして自分の見せたいものを見せるための会話のシフトを繰り返すことを考えたのである。

そのために用いたのが、解決志向ブリーフセラピーやナラティブ・セラピーの考え方を基にした会話だった。解決志向ブリーフセラピーでは、問題が無くなった後の状況や本来問題が生じてよい状況の中で問題が生じないという例外状況に焦点を当てながら会話を構成することを中心に行う。こうした会話をクライアントとともに構築することによってクライアントの認識する世界を再構築することを試みるのである(De Jong & Berg, 2008)。ナラティブ・セラピーでは、クライアント社会に流布している様々な言説の影響により、十分に生きられた会話ができなくなっていると考えられる。そして実際のセラピーでは、このときのクライアントの支配的な人生の物語(ドミナント・ストーリー)を、様々な可能性のある代わりの物語(オルタナティブ・ストーリー)に協働しながら書き換えることを目指す。そのために問題そのものを「外在化(White & Epston, 1990)」し、そうした問題に影響を受けなかった「ユニークな結果」を重視していくのである(Morgan, 2000)。両者に共通しているのは、現実是人と人との言語を媒介とした相互作用によって構成されたものであるとする社会構成主義の考え方である。

国重(2013)は、流布している言説から見て良いと認められたことができないときに不全感や不能感を感じると述べている。児童生徒の理解のためには

「心の傷」の理解が必要であるという状況は、教員にとっては自分の専門性を揺るがすような「不全感や不能感」を感じる状況であったと考えられる。一方で、国重は「その問題の存在に正当性を与えるディスコース(言説)は必ず存在する」とも述べている。トラウマやPTSDを臨床心理学や精神医学からとらえるのではなく、学校教育という全く別の視点からとらえることも可能なのである。このことは、トラウマやPTSDを治すものとして捉えるのではなく、成長のきっかけと捉える考え方(近藤, 2012)にもつながっていくと考えられる。

3. 会話をシフトさせる試み

実際、震災に伴い転校した児童生徒の多くは、問題行動を生起させることなく通常の生活を続けていたこともわかっていた。こうした状況が生じていることこそ学校の教育力によるものだったのだが、一方で学校がそのことを表明することは、かえって震災の問題を軽視していると受け取られかねない社会的状況もあった。そこでSCは、被災転校生たちが問題行動を生じさせていないことを、学校や担任が行うクラス経営や転校生への配慮といった、本来学校が得意とする教育技術と結びつけるような会話のシフトを試みていくこととした。

では実際にどのように会話をシフトさせたのだろうか。

「心理主義化」された状況での会話は、問題を抱える児童生徒を受け持つコンサルティである教員に対して、コンサルタントであるスクールカウンセラーがコンサルティの専門性を尊重しながらコンサルティのできる対応策について話し合うというものになる。この場合、コンサルティとコンサルタントの間には、コンサルタントが上というヒエラルキーが形成される。その結果、担任や関係者はスクールカウンセラーに対してコンサルテーションの話題に沿うような児童生徒の問題行動を話題とすることが多くなるといえる。このような内容の会話が始めると、そこから会話をシフトさせることはなかなか難しいものになってしまう。そこでSCはできるだけ早い段階で会話のシフトを心がけている。活動1では〈お母さんが心配されているようなことはあったのでしょうか?〉が、また、活動2では〈Cさんはクラスにはずいぶん早く慣れたということですか?〉がシフトすることを意図した質問である。こ

これらの質問をすることによって、SCの質問に対して担任や関係者が答えるというヒエラルキーの逆転が生じ、会話が変化し始めている。

活動3では、SCは助言者の立場で合同の情報交換会議に出席している。こうした合同の情報交換会議が行われること自体が、転校生が学校の中で問題行動とラベル付けされるような行動をしていないことが推測された。実際、担任からは問題は見られないという情報が話され問題がないことが確認できたので、比較的早い段階で担任や学校が行った行動が児童の問題行動を抑止しているという枠組みでの質問ができています。これにより、SCは自分が助言者という上のポジションから質問者という下のポジションを取ることができ、さらに担任や学校が行った活動を意味あるものとして意味づけることが可能となっている。また、これらの会話の中であえて心理学用語を使わないこともSCを質問者の立場にしていることにつながっているといえるだろう。

このようにして、被災転校生を巡るトラウマの語りから、それに対抗するために活動する教員の行為が中心になる語りにシフトした結果、コンサルテーションにおける話題そのものが変化したと考えられる。活動1では話題がLDの診断を受けている児童の対応になることが考えられたが、担任が行ってきた学級経営や転校生受け入れの方法について尋ねることにより、学校で行われる連絡調整の重要性を再確認する会話となった。活動2では、聴覚に問題があり最近になって適応が良くない児童に対する関わりのお話が、病休する担任から新担任への引き継ぎの場となった。活動3では被災児童には何ら懸念がないことがクラス担任それぞれから表明され、SCが驚きを持って学級経営法をたずねることにより、学校が常日頃行ってきた学級経営法や転校生対応が、被災転校生に対しても効果的に作用していることが確認されたのである。

トラウマやPTSDが臨床心理学や精神医学の中で語られる場合、どうしても治療や支援が中心となって個人の枠組みで考えられてしまうことになり、学校教育とは相容れないものになってしまう。しかし、学校教育の中でこれらを語ることも十分可能であることがわかる。そして、スクールカウンセラーはこうした学校教育での成功の語りを作り出す役割を求められていると考えられる。

VI おわりに

緊急SC派遣事業はその後も続けられた。しかし、秋田県内では「心のケア」が必要になるような事例は実際にはほとんど生じなかったことがその後明らかになった。被災転校生にとっての問題は、離れたところで暮らすことに対する不安であり、両親が単身赴任したりして離ればなれとなって生活しなければならぬという悩みに集約されていった。これらは、学校教育と通常のスクールカウンセリング活動の中で対応できる問題と考えられ、その結果2年目、3年目の緊急SC活動では、活動初年度とは異なり、教員の側から被災転校生に問題が生じていないことが躊躇なく話されるようになっていった。こうした学校教育の中で行われたごく当たり前の関わりが、被災転校生の学校生活に良い影響を与えたのは明らかであり、ここにも秋田の教育力の高さを見ることができよう。

付記

本稿は、2012年に行われた日本ブリーフサイコセラピー学会第22回大会での発表内容を大幅に改変したものである。

文献

- Caplan,G.(1961). *An approach to community mental health*, New York: Grune & Stratton. 加藤正明(監)・山本和郎(訳)(1968). 地域精神衛生の理論と実際. 医学書院.
- De Jong,P. & berg,I.K. (2008). *Interviewing for solutions,4th edition*, Belmont: Brooks/Cole.
- 伊藤茂樹(2005). 学校教育における心理主義——批判的検討. 駒澤大学教育学研究論集21, 5-18.
- 近藤卓(編)(2012). PTG心的外傷後成長——トラウマを超えて, 金子書房.
- 国重浩一(2013). ナラティブ・セラピーの会話術——ディスコースとエイジェンシーという視点, 金子書房.
- 文部科学省(2009). 児童生徒の教育相談の充実について——生き生きとした子どもを育てる相談体制づくり, 教育相談等に関する調査研究協力者会議報告.
- Morgan,A. (2000). *What is narrative therapy?: An easy-to-read introduction*. Adelaide: Dulwich Centre Publications. 小森康永・上田牧子(訳)

- (2003). ナラティブ・セラピーって何?. 金剛出版.
- 森 真一 (2000). 自己コントロールの檻——感情マネジメント社会の現実. 講談社選書メチエ.
- 永江 朗 (2012). インタビュー術!. 講談社現代新書.
- 中島浩壽 (2008). 「心理主義」と、その教育への浸透. 日本社会臨床学会 (編) シリーズ「社会臨床の視界」4 心理主義化する社会, 現代書館, 19-74.
- 小沢牧子 (2002). 「心の専門家」はいらない. 洋泉社.
- 下山晴彦 (2001). 日本の臨床心理学の課題. 下村晴彦・丹野義彦 (編) 講座臨床心理学 I 臨床心理学とは何か, 東京大学出版会, 121-134.
- White, M. & Epston, D. (1990). *Narrative means to therapeutic ends*, New York: W.W.Norton. 小森康永 (訳) (1992) 物語としての家族, 金剛出版.
- 山本和郎 (1986). コミュニティ心理学——地域臨床の理論と実践. 東京大学出版会.
- 吉田武男・中井孝章 (2003). カウンセラーは学校を救えるか——「心理主義化する学校」の病理と変革. 昭和堂.

Summary

With the introduction of the school counselor to school education, "psychologism in school education" has become a problem. As a result of the Great East Japan Earthquake that occurred in

March 2011, Akita Prefecture has accepted a large number of transfer students from the disaster areas. Along with this, Sudden "psychologism" has progressed. A discourse that transfer students have "psychological trauma" was spread, emergency school counselor is introduced into the school, and counseling for the transfer students and consultation for the teachers were carried out. As one of the emergency school counselor, I decided to center activities counseling for teachers. In carrying out the consultation, I did not adopt the "psychological trauma" discourse, took the role of the interviewer that clarified the activities and ideas that teachers have made at the time of transfer student acceptance. In this paper, I reported the consultation 3 activities, and discussed from the point of view of social constructionism psychotherapy.

Key Words : school counseling, psychologism, consultation, social constructionism psychotherapy, the Great East Japan Earthquake

(Received January 8, 2016)